
小さいお話

香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さいお話

【Nコード】

N4392Y

【作者名】

香夜

【あらすじ】

黒崎 一護に関する小ネタ集。お話未満の小さい思いつきを載せて行きます。ここから話を作ることもあるかも？

設定なんかも置くかもです。

気に入ったネタ・設定があれば持って行って下さっても構いません。

ポッキーの日

「双子の場合」

「お兄ちゃん」

「一兄」

「ん？ どうし……」

ずいっ

「どっひとすう（どっちとする）？」「

ポッキーをくわえた二人ににじり寄られる。

「……………」

一護、困惑。

二人が一護を取り合ってたらしい。それで一護は困ってたら更にいい。

結局二人のをいっぺんにくわえてたらおいしい（＾＾）

これより先は『王様ゲーム的な何かをしててこうなった』という設定で。

く たつきの場合く

「……………」
ボリボリ

「……………」
ボリボリ

お互い冷静。

周りに

ポキンッ

ある程度食べたらずる。

.....
（おもしろくねえ！）

全く動じない二人が見たい。

織姫の場合

[illegible]

「……………（どうすっかなあこれ……………井上、固まっちゃってるし……………そんなに嫌か）」

（がんばれ織姫（井上さん）！！）

想い人を目の前にして動けなくなつた織姫と、たつき以外の女の子相手だと動かない一護。

一護 織姫の図式が好きです。

ポッキーの日（後書き）

…… やっちゃった

後悔はしていない。

男性陣相手もいつかやりたい。

あなたに再び会ったためならば（前書き）

暗いです。

ルキア視点です。

あなたに再び会つたためならば

ゴポッ

ビチャビチャビチャビチャ……

口から吐き出された血が、地面に真っ赤な水溜まりを作る。

「……………」

（死ぬのか、わたしは）

特に感慨を抱くワケでもなく、冷静にそう思った。

ひどい混戦だった。

いつか石田が撒き餌を使った時と同程度 否、それ以上の数の虚
が、空座町に現れたのだ。

隊長格がいるとは言え、現世の戦力だけでは間に合わず、応援を呼
んだが……

（それよりも先に、わたしは死ぬのだろうな）

悲観的になっている訳ではない。現状から予測される事実だ。

虚に喰われるのが先か、力尽きるのが先か

違いがあるとすれば、そのくらいだろう。

「……………」

自分が死んだら、あの少年は泣くのだろうか

ふと、そんな考えが回転の鈍くなりつつある頭を過ぎった。

普段は何かと言い合う仲だが、盛大に泣くだろうし、悲しむだろう。別に自惚れている訳ではない。

彼は、そういう男だ。

特に、今回の戦いが始まった時に彼は自分の一番近くにいた。

『近くにいたのに、護れなかった』

そう言っただけで泣く彼が容易に想像出来た。

「……………」

（生きたい）

まだ生きたい。やり残したこと、未練も山ほどある。

（死にたくない）

兄様ともっとお話したい

（嫌だ）

恋次と甘味談議を交わしたい

（いやだ）

井上と現世の可愛いものや服を買いに行きたい

（イヤだ）

そして何より

（いやだイヤだいやだイヤダ嫌だ嫌ダアアアア！！）

死にたくない。

生きたい。

そのためならば……

そつと手を伸ばす。

消える直前の虚に向かつて。

例え虚になったとしても

わたしは

まだ生きたい。やり残したこと、未練も山ほどある。
そして何より

一護に泣き顔なんてさせたくないから。

これはこれで、彼を悲しませる選択なのだろう。
それでも、泣いて泣いて、声が擦り切れるほど、目玉が溶けるほど

泣くだろつ彼を思えば。
無惨な死に様を晒すよりかは、
よほど。

あなたに再び会っためならば（後書き）

ー ルキです。

すいませんー回バッドエンドフラグ書きたかったです。

ちよう暗い……

こつちのお話はすつごい暗い話がいっぱい来るかも？

例えば私、長編の構想を練ると、たつきと一護とが絡む話は一護がヤンデレ化します。

「足の一本二本もげば、どこにも行かないのかよ!」

「頼むから……お前だけは死なせたく無いんだ……だから……閉じ込めさせて?」

「俺だけ見てくれない眼なら……えぐっていい?」

等等。

そんなのの一場面がこつちに来るかもです。

軽いお話がいいという方は前書きを読んでお戻り下さい。

感想お待ちしております。

青の被魔師 × B L E A C H

一護：

二千年くらい生きてる。一応人間から生まれた人間。

生まれた時はから『力』が強すぎて疎まれてきた。

両親や家族は愛してくれていたが、だからこそ迷惑はかけられないと旅に。

重霊地っぽい森を見つけて、ここなら自分の『力』の影響を受けないと思い、住む。

傷ついた生き物（悪魔含む）を受け入れている内に更に強く、人間離れしていった。

死にかけていたコンを助け、主従に。

人間からは土地神扱い。実際、一護のおかげで害意ある悪魔は近づけない。なので悪いことはあまり起こらない。

自分の『力』を好いていない。被魔師等の者の中でも、理解のありそうな者を招き入れて封印を施してもらう。

あまり怒らない。

優しい（特に、小さいモノ・弱いモノ）。ただし怒ると怖い。

興味のあることに關しては別だが、基本的には受け身。自分からはあまり話し掛けない。

顔の部分は『封』という字の書かれた布で覆われている。

黒い着物を着ている（死白装と同じ）。

『力』を封じるための装飾品をたくさん付けている。

181cm 66kg

く使い魔になってからく

『最後の月牙天衝』を会得した直後くらいの髪を後ろでくくる。

174cm 61kg

昔自分で編み出した『鬼道』を操る。

『無月』状態がスタンダード。

粗筋：

ある山に、地元で”神聖”とされる森があり、昔は供え物が山と積みまわっていた。

だが最近人はあまり寄り付かなくなり、遂には森を壊してゴルフ場を作る計画が。

一護は諦めたが、他のもの達は大激怒。工事の邪魔をするようになる。この時点では弱い奴らだけが暴れてる。

そこへ、雪男率いる抜魔塾生が実地訓練を兼ねて研修に。この時に初めてそこそこの奴らが出てくる。

一旦森を出ようにも『何か』に邪魔させて出られない。

おまけに悪魔からの攻撃でみんなバラバラに散ってしまふ。

勝呂が困っていると、一護が現れる。

警戒していたが、再度襲ってきた悪魔から守ってくれたので、少し信用する。

何だかんだあって、事件解決。

「これからどうするか」と言われて困る一護。

そこで唐突にメフィスト登場。

「使い魔になるならば、居場所をあげましょう」と言われる。

主人に勝呂を選ぶ。コンに大反対されるが、黙らせる。

『契約』により大幅にパワーダウン。勝呂が強くなれば力も戻るし、更には元よりも強くなるかも知れないと言う。

元が人間なので普通の人間にも見える。怪しまれないように人間っぽく格好をする。それで勝呂のクラスに入ってくる。

普段は普通の生徒として生活。勉強は、学校のも塾のも、最初は勝呂に教えてもらう。すぐに慣れて自分から勉強するようになる。

青の祓魔師 × BLEACH（後書き）

書きちゃった……

最近青エク熱があつついんです……！

誰か……誰か、文才のある方………こんなお話書いて下さい

……！！

いないとは思いますが、『面白い、書いてみよう！』という方は
ぜひお願いします！！

誰よりも一番（前書き）

病み気味

狂一護？

誰よりも一番

「騙されていたよ、一護」

ルキアが口を開く。

「……………え？」

「見損なっただけ、一護」

続いて恋次が罵る。

「ルキア…………？ 恋次…………？」

いきなり何言っただ…………？」

動揺する一護。

それもそうだが、何の前置きも無しに蔑むように言葉を投げ掛けられ
ては、誰だって面食らってしまうだろう。

「チャドッ」

「つたく、この二人どう思うよ？」

「いきなり変なこと言い出しやがってよお」

その動揺を押し隠して親友に問い掛ける。

「……………っ」

バツと顔を背けられる。

「は、はは」

更に動揺する。

それを隠そうと笑うも、情けないほど声が震えてしまう。

「何だぁみんなして……新手のイジメかよ？ やり過ぎだつて」

いくらなんでも不安になるぜ？

紡ぐ言葉も不安そうに揺れるのを自覚する。

「虚勢を張るなよ、黒崎」

良い意味で『ライバル』と言える石田が、苛立ったようにそんな台詞を吐く

「石、」

「見ていて腹が立つ」

「!!!」

息が苦しい

なんで……なんで……

「一護」

「!!!」

振り返る。

幼なじみのたつきがいる。

「たつき……っ！ たつきは……たつきだけは、俺の味方だろ……
……？」

「……………」

ふいっと顔を背けられた。

今さっきの仲間達のどの言葉よりも、どんな対応よりも、たつきのその態度に何より傷ついた。

呆然とする一護に、背後から声が掛けられた。

「お兄ちゃん」

「一兄」

「……遊子、夏梨」

一護はホッとする。

この二人は俺の妹だ
何より誰より信じられる

精神的に傷ついていた一護はふらふらと二人に近づき、抱きしめようと

バツ

「「触らないで」」

手を振り払われる。

「あたし達から」

「お母さんを奪ったくせに」

「家族みたいな顔しないで」

「……!!」

息が詰まる

呼吸が苦しい

誰か……誰か、助け

ドン

いつの間にかじりじりと後退していた一護は、『何か』にぶつかっ
た。

「親父……」

後ろにいたのは、一心だった。

しっかりと一護の肩を支えてくれている。

一護は一瞬怯えたが、一心は大きく温かな手で一護の肩を包んでく
れていたし、何より彼は微笑んでいた。

なので一護はホッと息をつき、安心し

かけたその時。

ググッ……

「かつ、はっ……!!」

首を絞められた。

誰に？

父親、一心に。
笑顔のままで。

何で？ どうして？

そう聞きたくて、一心の目を覗き込み
固まった。

彼の瞳に、確かな怒りと悲しみを見て。

「お前が真咲を殺した」

「お前が罊に掛かったせいで」

「お前だけは」

「絶対に」

「許さない」

「お前が」

「真咲の代わりに」

「死ねば良かった……！」

『母親殺し』

ガバッ

ハアッハアッハア……

息が荒い。全力疾走でもした後のようだ。
手足が震えている。止めようにもコントロールが効かない。

頬が痒い。泣いていたようだ。

「……………アハ」

ぼつり、零れた。

「アハハ、アハ、アハハハハハッ！！」

一度零れたら、もう抑えられなかった。

今は夢だ。日頃から恐れていることが、夢になって今夜自分の前に現れたのだ。

信用しろと

信じろと

頼れと

誰よりも言ってきた自分が、誰よりも信用することも信じることも頼ることも出来ずにいる！

知られて、嫌われ、軽蔑され、憎まれることを恐れている！

これが、笑わずいられるものか！！

「ハ、ハハハハハ、ハハ……………」

笑いが収まってきた。

早く、何時もの『自分』に戻らなくては。

誰よりも信用され、信じられ、頼られる、

『俺』に……早く、

為らなくちゃ

誰よりも誰も信用しない信じない頼らない『黒崎一護』に

誰よりも一番（後書き）

感想……怖いですが、お待ちしております………

交渉（前書き）

設定：

たつきは男子空手部の主将から一護を引っ張り出してくるよう頼まれる。

希望は三千円。一応四千円まで用意有り。どうしてもダメなら自腹切って五千円。

上な感じです。

台詞と説明が主です。

交渉

「……ご、五千……」 恐る恐る

「高い、三千」 きつぱり

「ハアアア?! おま、ふざけんな! 俺ア、五千でも安いんだっ
つのー!」 チョイキレ気味

「こっちはそんなに出せないの、まけてよ」 冷静

「……」 落ち着く

「で?」

「……よ、四千なら……」

「三千」 ドきつぱり

「……」

「……」

「………わかった」 がっくり

一護が弱気の場合。

たつきには強く出られない一護とか萌える。一たつ好きとして。
ため息吐きまくりなんだけどやることはしっかりやる一護。そうじやないとたつきから鉄拳制裁喰らうからね！ まあ意外と真面目な性格だからってのもあるんだろうけど。

たつきは空手部の主将以下から泣いて喜ばれるといい。

切羽詰まってたんだよ、きつと。

そして、『断る』という選択肢は最初から無い一護。おいしい。

それに周りは驚いたり悔しがったりする。

「一週間で日給五千」 効果音『ドーン』

「う……！ まけなさいよ」 予想外に高くて動揺

「ああ？ さっきまでの会話聞いてなかったのか？ 俺ア、五千でも安いんだよ

お前相手だから安くしてやってんよ」

「……！」

「返事は？」 余裕

「よ……四千なら……」 悔しそうに

「う・せ・ん」

「……………わかったわよ」 めちゃくちゃ悔しそうに

一護が強気な場合。

こっちのが原作的に正しい気がする。

でもこの後空手部主将と直接交渉して四千にしておける。
安くしてあげるのはこっちも変わらない。おいしい。

交渉（後書き）

ggggですすみません。

こんなんでも感想とか頂けたら嬉しいです。

マジで恋した何秒後（前書き）

— たつ話。

ベタ。

マジで恋した何秒後

「……………黒さ……………んが、好……………でし……………」

「……………悪……………けど、……………考え……………」

「……………」

まーただよ。

開いた窓から風に乗って聞こえてくるのは、幼なじみが受けている告白の一部。

「懲りないよねえ……………」

断られることがほぼわかっている告白をする女子も、丁寧に断って好感を上げ、好意を持つ女子を無自覚に増やす幼なじみも。

「……………」

何時もは一緒に帰ったりしないのだが、今日は親が遅いので彼の家で晩御飯をご馳走になるのだ。

待っている間暇なので、幼なじみの彼について考えてみる。

幼なじみは、密かにモテる。

第一印象だけなら、

派手な髪色

眉間のシワ

ガラの良いとは言い難い口調
等々……

女子に好意を持たれる要素は中々無い。

しかし、少し付き合つと……

意外な頭の良さ

ぶっきらぼうな優しさ

礼儀正しいところ

e t c ……

結構良い物件であることに気付くのだ。

だが……

「あいつ、見た目の割にそーいうことに潔癖っつーか、くそ真面目
っつーか……とにかく、面倒くさいのよねえ」

『興味が無い訳じゃねえけど……』

好きでも何でもない相手と、試しに付き合つなんて出来ない

以前、そう言っていた。

「……」

あいつが誰かと付き合つたら、どんな風になるんだろう。

ふと、そんなことを考えた。

眉間のシワは無くなるんだろうか。

目尻を下げ、口元を緩め、微笑むのだろうか。

普通のぶっくらばうな感じはなりを潜めて、甘い声で名前を

『たつき』

.....

ボンッ

頭が沸騰した。

いや、そんな気がしただけだ。実際には人体は外的要因も無しに沸騰したりしない。

……なんて冷静に注釈を垂れている場合じゃなくて！

あ、あああああいつと、ナニ、あたし、そ、うぞう、して！

ああああああああああああ

ヤバイ。

ものすごくヤバイ。

何であたしとあいつで想像してんの、あたしの脳みそ！

落ち着け。

これはあれだ。

暇過ぎた脳みそがフラインプレーしちゃっただけだ。

だから落ち着けあたしの心臓……！

さっきからドクドクドクドクうつさいのよ！

一人悶えていると、

「おい、帰ろーぜえ……」

幼なじみの彼が戻ってきた。

ドクンッ

「早かったじゃん」

内心の動揺を押し隠し、声を掛ける。

……動揺？

否、そんなもの、してない。

今まで考えもしなかったことを考えたから、少し混乱しただけ。

「そーかあ？ 途中で泣かれたから宿めるのに時間掛かった気がするんだけど……」

「あちゃー大変だったわね」

大丈夫、何時も通り。

声は震えも上擦りもしてない。

……何時も、通り。

「にしてもあの子も断るかー……すごいキレイなサラサラロングストレートだったじゃん」

「あー確かに手触り良さそうだった……」

幼なじみの物言いに、軽く吹き出す。

「手触りって……犬じゃないんだから……！」

「は？……いやいや、そんなつもりじゃ……」

相手に失礼だと思ったのか、慌てて弁解仕出す彼に更に笑いが込み上げる。

こいつも、普通だ。

あたし達は、何時も通りだ。

あたしが、ちよつとごちゃごちゃ考えちゃっただけ。
あたし達は

「でも」

一通り弁解して気が済んだのか、彼は何でもないことの様に切り出してきた。

「俺はお前の髪の方が好きだけどな」

「は」

スルッ

髪に手を伸ばされた。

指通りを楽しむ様に、何度も。

「遊子や夏梨の髪も好きだけど、お前の髪が一番好きだな、俺」

「……………！」

こいつは……………！

赤くなつた顔を机に伏せる。

鈍感な幼なじみは、心配そうに名前を呼んでくる。

彼は本当に『どの犬の手触りが好きか』くらいにごく軽く話してい

て。

……こちらの動揺なんて、まるで気付いていない。

ああ、認めよう。

あたしは、何時からかはわからないけど、

とつくに彼に恋していたと！

マジで恋した何秒後（後書き）

ベタな『幼なじみ恋物語』

偽物臭プンプン。

名前は何となく出ませんでした。

ど、どうでしょう……？（びくびく）

誤字・脱字がありましたら、ご指摘よろしくお願いします。

感想……「くれてやってもいい」という方がいらっしゃれば、送って下さい。

泣いて喜びます。

いい夫婦の日（前書き）

ー＋たつ話。

みんなで何か作業します。

いい夫婦の日

「アレ取って」

「はいよ……あ、そっちのそれ取ってくれ」
「ん」

「お前らさあ……」

「「あ？」」

「ハモ………何でもないデス」

「あつそ。……あ、そっちやアンタ、こないだ貸したやつ返しなさいよ」

「……あーアレなあ。悪い、まだ読んでねえ」

「はあ？ アンタ遅すぎ」

「そーいうお前こそ、先々週の、返せよ」

「うわごめん、まだ聴いてない」

「人のこと言えねえじゃねえか」

「だからごめんって」

「ったく……そっちやお前、今日ウチ来るんだよな？」

「そうよーゴチになります」

「なんかリクエストあるか？ 夕飯の」

「……鍋。モツ鍋。あつたまりたい」

「ん、わかった。帰り買いもん付き合えよ？ 部活ねえんだし」

「リョーカイ」

「……お・ま・え・ら・なああああああ！！」

「うわー！！」

「なによ、デカイ声出して……」

「いい加減にしろっつもの！ いくら今日だからって！！」

「「は？」」

「ハモるなああああ！！」

「今日って……」

「なんかあつたつけ？ 覚えてる？」

「……覚えてねえな」

「お前らが無自覚なのはわかるけど！ ツーカーっぷりだとか、夕飯のリクエスト聞くとか、相手の予定知ってるとかあ……！ うつつうつ……」

「……（なんか気持ち悪い）」

「いくら今日が、」

11月22（いい夫婦の日）

だからって、お前らの夫婦っぷりは独り身には寂しいんだよおお

……！！」

「……あー……」

「ナニそのどうでもよさげな感じ！」

「「どうでもいいし」」

「……うわぁーん！！ 誰か、誰か俺の気持ちをわかってくれるやつはい」

「うるさいんで黙ってもらえませんか？」

「敬語イヤー！！」

ggggg。

強制終了。

いい夫婦の日（後書き）

グダグダですみません。

書きたくなって授業の合間の一時間半でやっちゃいました（／／／）

また特に意味も無く名前を出さないでみました。

……どれだけ出来るか、ちょっと楽しくなってきました。

感想お待ちしております。

いい兄さんの日（前書き）

黒崎兄妹のお話です。

いい兄さんの日

ブォォ……

ドライヤーの音が夜の黒崎家のリビングに響く。

(……気持ちいいなあ)

食器の片付けも宿題も終わっていて、後は髪を乾かせば寝るだけ。そんな状況でこんな気持ち良さは、『眠れ』と言っているようなもの。

事実、段々と瞼が重く

「コラ寝るな」

「あ、」

ドライヤーが止まってしまった。

いや、正確に言えば黒崎家の長男　一護が止めたのだ。

「うー……だあってえ、すごい気持ちいいんだもん……」

不満そうに唸るのは、一護の妹　遊子だった。

「だからって寝るな。中学生のお前運ぶの、大変なんだぞ」

「……！　あ、あたし……太った？！」

「……あー、違う違う。『成長』したんだよ」

「……でもお、お兄ちゃんの言い方って傷つく！」

「ええ……」

遊子と一護が軽くじゃれ合っていると、

「何してんの？」

一護のもう一人の妹　夏梨が風呂から上がってきた。

「お、上がったか」

「あ、夏梨ちゃん！　あのねーお兄ちゃんに髪乾かしてもらったの！」

「……ふーん」

「えへへえ……いいでしょお」
「別に」

自慢げな遊子とは裏腹に、夏梨はあくまでもクールだ。

（対照的だよなあ、双子だってのに）

遊子はかなりわかりやすく甘えてくる。

夏梨は普段クールに振る舞っているせいか、甘えたい時に甘えるのが苦手だ。非常にわかり難い。

だが

（……ん？）

夏梨はまだ髪を乾かしていない。

もちろんドライヤーは一護が持っているが、遊子の髪はもう乾いているので、一言『貸して』と言えば貸す。

飯にまだ使えないとしても、タオルで水分をある程度拭う等するだろう。夏梨は無駄を嫌う。

それにさっきからこつちをちらちらと見て

（ああ）

全くこいつは……

「夏梨」

チヨイチヨイ、と手招きする。

訝しげな顔をしながらも素直に近づいてきた夏梨を

ぐいつ

「う、わ！」

強引に自分の足の間に座らせた。

「ちょ、一兄！」

「んー？」

ブオオオ……

「『んー？』じゃないでしょ！ 何すんのさ！」

「お前の髪乾かそうと思って」

「……！」

顔を赤くする夏梨に思わず笑いが浮かぶ。
ばれてないと思っていたのか。

「……頼んでないっ！」

「そうだなー俺がやりたいだけ」

「~~~~~!!」

更に赤くなる夏梨。

遊子はかなりわかりやすく甘えてくる。

夏梨は普段クールに振る舞っているせいか、甘えたい時に甘えるのが苦手だ。非常にわかり難い。

だが 一護にはわかる。

「お兄ちゃんひどい！ あたしの時は渋々だったのに！」

「結局やっただからいいじゃねえか」

「良くない!!」

こうして。

遊子は一護に食ってかかり、夏梨は顔を真っ赤にしてされるがままという、珍しい黒崎兄妹の夜は更けていった

いい兄さんの日（後書き）

11月23日は

『いい兄さんの日』

らしいです。

それに因んでやってみました？

どうも私は遊子を甘えたに、夏梨はツンデレにしたいらしいです。

（めちやくちや楽しい　^　^　）

感想お待ちしております。

BLEACH × 青の祓魔師？

一心さん：騎士団に属さない（仏系？）祓魔師。幼い一護を悪魔から庇い、死亡。 雨の日

真咲さん：一般人。悪魔のこととかは知ってた。一心さんの死により悪魔落ちする。そこを一護に斬られる。 雨の日

一護：両親の死に関わったことがめちゃくちゃトラウマ。雨の日は情緒不安定になる。浦原さん達により『斬拳走鬼』は完璧に近い。

浦原一味（？）：剣術は浦原さん。白打は雨とジン太。瞬歩は夜一さん。鬼道はテッサイさんがそれぞれ一護を鍛える。

基本設定はこんなところ。

たつきちゃんと双子は絶対出したい！……けど。

両親の死後、黒崎兄妹は有沢家に居候。仲良し。学校も一緒。シスコンブラコンな黒崎兄妹。兄妹はたつきちゃん大好き。

にするか、

両親の死後、一護は浦原さん達と行方をくらます。双子は有沢家預かり。体育科の特待生として聖十字学園にたつきが来るまで音信不通に。

悩む。

一護の性格も、

自分からはあまり話かけないけど、人嫌いではない。仲良くなった
ら執着する。

か、

徹底的に人嫌い。話しかけると顔をしかめる。なまじ強い分勝呂も
「ちゃんと連携せえや！」とか言えない。足引っ張るから。

めっちゃ悩むく(、、(、) >

B L E A C H × 青の被魔師？（後書き）

この設定も、どなたか使いたい方は持っていてください

俺の『一つ』（前書き）

死ネタ。
暗いです。

俺の『一つ』

ザアアア……

雨が降っている。

『あの日』と同じように

「……どうして」

小さな声で呟いたのは、一人の十代とおぼしき青年だった。
鮮やかな橙の髪をした彼は、二人の少女を抱えていた。

歳は同じくらい、髪色はそれぞれ黒と茶の、可愛らしい少女達だった。

「どうして」

二人は青年の妹だった。

「どうして」

大切な家族だった。

「どうして」

『死ぬまで守る』と誓った存在だった。

「ドウシテ」

その二人が、死んでいた。
冷たく、なっていた。

「どうして……！」

『一つのを護り抜けるように』
そんな願いが込められた、俺の名前。
この二人は、俺の『護り抜くもの』だった。
それなのに　　！

「う」

一つ、呻きが零れた。
零れ出したら、もう止まらなかった。

「うあああああああ！！！」

雨は止まない。
まるで、青年の心を表すかの様に

俺の『一つ』（後書き）

こっから一護が壊れる話とか、書きたい……！

私の中で、一護は周りに依存しているところがあると思っています。中でも、特に家族とたつきには依存しちゃってると妄想。

『守っている』ことに依存。

無くしたら、堪えられない。

そんな私には、月島能力は美味し過ぎました。

続くかも？

そう自分に言い聞かせた（前書き）

前の話の続き（？）です。

そう自分に言い聞かせた

「何故だ……」

吹き抜ける風の音が煩い中、呟く様に問い掛けるその声は、不思議とその場に居る者達の耳にはつきりと響いた。

「何故、この様なことを……！」

問うのは、黒髪の少女だった。

彼女の後ろには、複数の人影があった。

様々な髪・瞳の色であったが、一つ共通点があった。

皆が黒い着物 『死白装』を着た”死神”であること。

そして……黒髪の少女の前にいる青年もまた、着ていた。

ただし彼は 『代行』であったが。

青年は鮮やかな、太陽の様な橙の髪色を持っていた。

太陽の様な明るさは持っていなかった。

むしろ普段はローテンションで、目付きの悪さから周りを遠ざける様な人間だった。

だが、迷っている者、困っている者の道を照らす……そんな青年だった。

それなのに、今は。

「答える！ 何故……大量虐殺などしたのだ……！」

大量の血に染まっていた（……………）。

その傍には、幾人もの死傷者が。彼は……俯いていた。
彼女の問い掛けにも、ぴくりとも動かない。

何故だ？

彼は確かにこの様なことが出来る實力を持っていたが……彼はその力を『護る』為に使ってきた。

その彼が何故、護るべき仲間に攻撃など……？

「なあ」

と。

俯いたままだった青年が、声を発した。

「い……！」

「お前らに、俺の名前の意味って、話したことあったっけ？」

少女の幼なじみの赤髪の男が青年の名を呼ぶより早く、彼は問い掛けた。

「お前の、名の意味……？」

注意深く聞き返したのは、銀髪の少年。

他の面々は、青年の質問の意図が分からず戸惑っていた。

そんな周囲を他所に、青年は語りだした。

「俺の名前は、『一つのものを護り抜ける様に』って付けられたんだ」

皆、納得した。

彼が何故『護る』ことにこだわる　否、『固執』と言ってもいい
のか。

だが、疑問が振り返す。
何故、この様なことを？

「俺は昔、『一つ』を護れなかった。」

え……？

どういうことだ？

ほとんどの者が意味を掴めずにいる中、黒髪の少女だけは息を呑む。

まさか……！

「あの時、あいつらには随分悲しい想いをさせちゃった……だから、
あいつらは『死ぬまで護る』って誓ったんだ」

「でも、護れなかった」

「また、失った」

「『護る』ことの出来ない俺に、意味なんてないし」

「『護るべき家族』がいない世界なんて、俺にとって……」

「存在する価値が、無い」

！

死神達は、固まった。

言い終えたと同時にこちらに視線を向けた青年の顔を見て。

青年は、笑っていた。

張り付けた様な、歪な笑顔。

その瞳の奥には、狂気が見え隠れしていた。

「俺は」

ゆらり、と。

彼は刀を構える。

「お前らも、認めねえぜ……？」

ざわっ

背筋に『恐怖』が走った。

歴戦の戦士である彼らが、戦い始めてそう年月の経っていない青年を『畏れた』のだ。

そのことに何かを思うより、何か行動を起こすより早く、

「じゃあな」

彼らの世界は、黒く染まった。

最期に、泣かない彼の涙が見えた気がしたのは、きっと気のせいだろう。

そう自分に言い聞かせた（後書き）

タイトルの意味は、

殺したくないのに、殺さずにいらなかったなんて、一護が可哀相過ぎるから

です。

注釈要る様なイミフな文章すみません……

感想お待ちしております。

BLEACH × 青の祓魔師？続

一護：長髪。

双子と一緒の場合：何か目に見える戒めのものが欲しかった。

双子がいない場合：上の理由＋家族以外に髪を触らせなくなかった。

アクセサリーをたくさん付けている。

力を抑制するため。

浦原さん作。「あなたが死ぬくらいの衝撃を受けても壊れませんよ

！！」 ドヤ顔

胸に『斬』の入れ墨が入っている。

何かあつたらそのしたに『月』という字を指で書き、「斬月」と言う
と、斬月が出てくる。

すぐに出せる様に常に開襟（めだかBOXの阿久根みたいな）。

細身だが鍛えてあるので見苦しくはない。

長髪＋生れつきだと信じてもらえない髪色＋常にかいている胸元＋
そこから覗く入れ墨

＝不良

の図式が一般生徒の頭に出て上がっている。

しかし、

頭：めちやくちやいい（奨学生。学内順位一桁）

腕っ節：めちやくちや強い（格好のせいで売られた喧嘩を全て買い、
全てに勝っている）

容姿：めちやくちや美人（垂れ目以外母親似）

なので、一部にコアなファンがいる。

料理の腕前：燐には劣るが普通に美味しい。お菓子なら燐を凌ぎ、プロ級。

コン：黒崎家に代々仕える。
呼びかけは、

「闇裂くぐりの血を引く者、御願ごんい奉る。現世になりいでぬ過ち犯し穢れしものをば、其の力を以て、神払いに払いたまえ」

黒崎は闇裂がなまったもの。

普段は、

ライオンのぬいぐるみに憑依している。普通の人にも見える。

or

小さいライオン姿（REBORNの主人公・沢田綱吉の匣兵器みたいな）。普通の人には見えない。

という感じで。

一護のことは「代々の契約だから」という以上に大切な相棒。

女好き。

志摩とはよくエロ談義をする。

BLEACH × 青の祓魔師？続（後書き）

自分で書きたい……でも……文才が……！！

御自由にお使い下さい。

一報くだされば、どのようになさっても問題なしです。
むしろ使ってもらえたことに床ローリングします。

……まあ無いでしょうか？

一度使って頂いただけでも奇跡だし。

黎音さんが私の『BLEACH×青の祓魔師？』設定で小説を書いてくださりました！！

恐縮です。

私のものとは大違いに面白いお話です！是非ぜひ一読してみてくださいませ。

誰かを本気で嫌う一護

ストーカー：一護の後輩。

ドSで有名だったが、一護にのされた後はドMとして有名に。ただし一護限定なので普通の奴にはドS。

乙女なドM。頬を染める様は気持ち悪い。by一護

一護は垂れ目設定なのでこちらは釣り目設定で。

美形。後に『残念な美形』を体言する様に。

馬芝中の番長。普段は部下に恐れられているが、ドM時は引かれている。

一護が好き過ぎて時々鼻血を出す。

一護の力に当てられて何かしら目覚める。

「先輩に叩かれた手は何故か宝物の様に思えたし、罵る言葉は俺の頭を甘く痺れさせた」

一護：マジで嫌い。視界に入れるのも嫌だし、触れるなんて以っての外。

けれど口で何を言っても聞かないので、実力行使で黙らせる。それによりまた惚れられるという悪循環。

キレるとドSに。

「顔が緩んでるぜ？ そんなに俺に蹴られたのが嬉しいのかよカス野郎」

チャド：一護の味方。ストーカーのことは気持ち悪いと思っているので、一護が暴行を行っても止めない。
逆に一護が「もう嫌だあいつに触りたくすらない」と根を上げたら代わりに制裁を加える。

「……ム」

たつき：チャドとほぼ同じ。

一度ストーカーに襲われかけた。その時に初めて一護がキレる。
以来たつきにストーカーが近寄ると何もしてなくとも問答無用でばこる様に。

「冗談とか比喻表現とかじゃなしにさ、アンター回死んで？ いやマジで」

誰かを本気で嫌う一護（後書き）

蛇蝎の如く誰かを嫌う一護ってのを想像してみました。

S一護…… イイツ!!

一護がストーキングされる話

朝、新聞を取る為にポストを見ると『黒崎一護様へ』と消印無しの手紙を発見する。

「なんだ？」軽い気持ちで開けると、明らかに盗撮と思われる写真が数枚と『愛してます』という言葉がびっしりと書かれた紙が……。

最初は「気持ち悪いけど……どうせ単なる悪戯。すぐに飽きる」と軽く考えていたが、段々とエスカレート。

周りには話していないので心配されるが、迷惑をかけたくないので「なんでもない」を繰り返す。

徐々に精神的な疲れが溜まっていく。

眠りが浅くなり、睡眠不足に。

ある日雑魚虚に苦戦し、やっとのことで倒す。周りから「最近どうした？」的なことを聞かれるが答えられず、ぶっ倒れる。

目を覚ますと浦原商店。

現世組と現世派遣組、浦原商店の店員達に「何があつたか説明しろ」詰め寄られる。

観念して話す。めちやくちや怒られる。

学校の友人にも知られる。そこでもめちやくちや怒られる。

水色の指揮のもと（今は上手くかわすけど、昔は色々あつた為詳し

いから）みんなでストーカーを探して魂の底から後悔させる様な制裁を加える。

ストーカーは男でも女でもおいしいと思う。

一護がストーキングされる話（後書き）

『一護はみんなに守られてたらしいよね！』
というコンセプトで考えた。

いつか書きたい。もしくは読みたい。

BLEACH×絶対可憐チルドレン

一護がサイコキノ。

めちゃくちゃ力が強い（薫より）。しかし本人は無意識にセーブしている。それでも並のサイコキノでは太刀打ちできない。流体コントロールなどの細かい調整もできる。

ただし文字通り血を吐く様な努力の末。元々は超不器用。

チルドレンのお兄ちゃんポジ。

ハウンドの二人も懐く。

ダブルフェイスの二人には可愛がられる。

不二子と賢木と夜一にはいじられる。

皆本には、普段はハウンドの二人と同じように扱われるが、チルドレンのストッパーとして尊敬もされている。

直美とは、『上司のセクハラ被害の会』を築く。

担当は夜一。

からかいとしてセクハラを受け続ける。

昔からなので、今はあまり反応しない。

そのせいで、「女に興味が無いんじゃない……」という不名誉な疑いがかかった事も。

生まれた時から力はあった。

段々と強力になっていくが、本人と家族が離れる事を酷く嫌がったためバベルには入っていなかった。

9歳の時の6月17日に、家族共々『普通の人々』の襲撃を受ける。それを、直々に勧誘しようとしてきた桐壺局長が救出する。

事件解決後、接待された黒崎家はあっさりバベル入りを了承。

「あんなに必死に守ろうとしてくれる人がトップなら安心」

という事らしい。

それ以来桐壺に懐く。

第二の父親　　どころか、実際に接する時間が長いせいで実の父親を時々忘れる。

黒崎家：

一心…ファミコン。最近誰も父親として構ってくれない悲しみを桐壺にぶつける。

真咲…襲撃の際に怪我を負う。夏でも長袖を着なければならなくなつたが、それ以外は元気。

遊子…お兄ちゃんっ子。レベル2のテレパス。可愛い。

夏梨…レベル2のサイコキノ。しかし少しずつ強くなっている様子なので将来兄の様になるかも？

百々（もも）（オリキャラ）…黒崎家の末っ子。2歳。一護を「にーた」と呼ぶ。検査は陰性だが、強い力を秘めている可能性もある。

第二人格（BLEACHだと『内なる虚』に当たる）がある。

超能力があるせいで受ける不当な扱いに対する不満が、徐々に育てていった人格。

ある時兵部に無理矢理引きずり出される。
非常に好戦的。誰にでも勝負を仕掛ける。

兵部の様に様々な力が使える（実は一護も使える。セーブしているだけ）。

兵部からは『絶対の王』アブソルート・キングと呼ばれる。
チルドレン共々誘われている。

薫 兄ちゃん
紫穂 兄さん
葵 兄はん
と呼ぶ。

BLEACH×絶対可憐チルドレン（後書き）

マイナーな……

誰も喜ばんだろーな！……

いいんだよ好きだから！！

文才皆無なせいで脳内妄想で我慢するしかないけど！

うがあああ！！

誰か、誰か書いて下されエエエ！！

書いて下さる方、随時お待ちしております。

DM vs DS (前書き)

『誰かを本気で嫌う一護』の設定で出来たお話。

ドM vs ドS

ザッ……

一人の男が空座第一高校の正門に立った。

「ふっ……ふふふ……ふふふふ……」

嬉しそうに、楽しそうに笑う一人その姿は不審者そのものだ。

と。

男はそつと一枚の写真を取り出した。
そこに写っているのは

「待っててくださいね……い・ち・ち先輩」

語尾にハートマークでも付けそうな調子で男が呟いた通り、黒崎一護だった

ザワザワ……

ザワザワ……

「帰りどこ寄るー？」「駅前に……」「今日の7時からのアレ、見るか？」「出ないんだろ？ 見ねえよ」

騒がしい放課後。

これからの予定を話す楽しげな声が飛び交う中、一護はさつさと帰り支度を済ませていく。

遊び回る時間があるなら勉強したいし、虚が出れば中断しなければならぬなら最初から遊びに行きたくない。

「いつちごー！ 帰りどつか行こーぜー！！」

……まあそんな一護の心情など全く分からない奴もいるが。そんな奴には、

「じゃあなー水色ー」

「うん、また明日」

「無視？！」

こういう仕打ちが待っている。

啓吾の様なタイプは反応を返すと調子に乗るので、こういった態度をたまに取るのだ。

ここまでは、普段と変わらない『日常』だ。

”ここまで”は。

「お久しぶりですねえ……一護先輩」

『日常』が壊れた 色んな意味で。

後に『その事件』について尋ねられた一護のクラスメイトAは、遠い目をしながら、そう語ったという。

声を発したのは、正門でごちゃごちゃ言っていた不審者（仮）だ。この不審者……言動こそ怪しさ満点だったが、随分と整った顔立ち

をしていた。

切れ長で釣り上がり気味の目。

すつと通った鼻筋。

薄い唇。

それらのパーツが絶妙な位置で配置されている。いわゆる『美形』と呼ばれる部類の男だった。

その男が、真つすぐに一護を見ていた。

周りにいたクラスメイトはざわめいた。

あんなのが、不良と名高い黒崎と、どんな関係だ？
みな、興味津々だった。

と。

男の登場から、暫し固まっていた一護が動いた。

ドン

周りが「え？」と思う間もなかった。

パンチでもくれたのかと思うプッシュだった。

男は教室の出入口に立っていたのだが、今は廊下の窓からのけ反り
つつ上半身を出していた。

……窓が閉まっていたら、どうなってたんだ……

そこにいた全員がそう思い、背筋が寒くなった。

「ちょ、おい一護？ お前何やってんだよ、その人……」

「人？ どこに人がいんだよ、俺はゴミがあつたから除けたただけだ

ぜ？」

周りは固まっていた。

一護と一緒にいるせいで荒事に若干慣れていた啓吾は、声をかけたことを後悔した。

冷え切ってる！ ヤバいくらいに空気が冷えてる……！！

こんな一護は見たことがなかった。

「……なあ啓吾」

「は、はははいい？！」

「今からどっか行かねえか？」

「……へ？」

「ゲーセンとか、カラオケとか」

何が起きるのかと身構えていたが、予想外のお誘いに戸惑う。

しかも一護が突き飛ばした男は未だ動かない。この場を離れない方がいいのでは？

……が、今は逆らうべきではないと啓吾は判断し、

「お、オッケー！」

とゴーサインを出す。

「よっしゃ、今日は不快なモン見ちまったからゾンビ撃ち殺したり大声で叫ぶとかしてえんだー」

……すぐに後悔した。

（いやいやいや、落ち着け俺！ 上手く発散されれば俺に被害は来ない！……答だ）

必死に考える。先ほどの男を見る限り、冗談抜きで命が危ない。

（カラオケはだめだ……閉鎖された空間で今の一護と一緒にとか危険過ぎる！

なら……カラオケだ！ 一護は元々関係ない奴巻き込むの嫌だし、ゲームしてすっきりしたら帰れる！）

啓吾が閃いたその瞬間。

「い……ちご、せ……ぱ……い……」

吹っ飛ばされた男が呻きながら教室に入ってきたのだ。
教室内に緊張が走る。

続いて男の口から零れ出たのは

「ああ……もっと、もっとしてください……」

恍惚とした声だった……

教室内の空気は再び固まった。

え？ こいつ、黒崎に喧嘩売りにきたんじゃないの？ んで振り返ちにされたんじゃない……

周囲が静かに混乱する中、男は構わず喋り続ける。

「『俺に踏まれるのがそんなに嬉しいか？ 顔がにやけてるぜド変態』って罵りながら足蹴にしてください！

『てめえ、口さえ塞げばいいサンドバッグになるな』って嘲笑しながら殴ってください！

ゴミクズとか、汚らしいものでも見る様な絶対零度の視線で蔑んでくださいいい！！」

「……」

周囲、ドン引き。

まあ……かなり見目の良い男がそんな台詞を陶然とした様子で吐けば、そうなるだろう。

そんな微妙な空気の中、

「ふ……ふふ、ふふふふ……」

一護が、背後になにやら黒いオーラを纏いつつ笑い始めた。

「お前……アメリカかどつかの病院に行って、その病気、治してもらったんじゃないのか……？」

「ああ……確かに変な病院に連れて行かれましたよ。」

失礼しちゃいますよね！ そいつら、俺『達』の愛を病気だなんて言うんだ」

「俺『達』じゃねえエエエ！！

お前の一方通行だ！！

俺はお前なんぞ視界にすら入れたくないほど大事ッ嫌いなんだよ！！！！」

「先輩つたら……人が多いからって……照・れ・屋・さ・ん」

一護の目が急速に濁り始めた。
現実逃避をしているようだ。

（無理ないよなあ……）

（俺もあんな言われたらああなるわ……しかも語尾にハートマーク付き）

（黒崎……可愛いそうに……）

周囲から同情を買っている一護に、男は更なる精神的攻撃（男にとっては求愛行動）を繰り出す。

「帰国してすぐにコレ買ったんですよ、ハンディサイズの拷問器具とリード！」

拷問器具の方は一護先輩のお家に帰ってから試しましょうね？

リードは今から付けて町内一周デートしてから帰りましょう！

あ、デートの途中でケーキ屋に寄りましょうね、ご家族に会うのに手ぶらはダメですし。

好みは既にリサーチ済みなので問題ありませんよ！ 近い将来家族はなる方達ですからね、とつくに調べて……」

べらべらと気色の悪い騒音を垂れ流す男によって、一護を含む周囲の人間はほぼ生気を失いつつあった。

（気持ち悪い……）

（ダメだ……聞いてるだけで気絶しそう……）

（テレビでたまあにこんな奴いるけど……生で見ると段違いだな……）

（キガイだよ……）

……と。

いきなり、男が吹っ飛んだ。

今回は一護は動いてない。

すると？

「あんた……『二度と一護に関わるな』って、あたし言ったはずなんだけど……？」

「！ たつき……！！」

救世主は一護の幼なじみ、有沢たつきだった。

彼女が男を後ろから蹴り飛ばしたのだ。

「忘れ物取りに戻ってみれば……なんで『コレ』が日本にいるわけ？」

「そんなの、一護先輩と再び愛を育み合うために決まっ」

ドゴォッ！

「よし分かった分かったからてめえは速やかに永遠に黙れキモいんだよマジで」

また気持ち悪いことを言い始めた男を、たつきは蹴り一発で沈めてみせた。

「たつき……マジで助かったぜ、あいつに触ることすら苦痛だったんだ……」

「あんたが殴ると余計に喜ぶしね……かと言って反撃しないならあなたの貞操がヤバイし……」

「そのことは言わんでくれ……考えない様にしてるんだ……」

……二人ともサラッとすごい会話をしている。

え？ 貞操？

黒崎って『そういう』意味でも狙われてんの？

又しても周囲が混乱の渦に叩き込まれつつあったが、

「んじゃ、あたしはこいつ捨てて来るわ。あんたは明日からなるべく一人になるんじゃないわよ、あたしも一緒に居られる時は一緒に居て守るけど」

「……たつきが男前過ぎて惚れそうだ」

「そんな！！ ちよっと離れてたからって浮気でぐぴゃあ」

「「黙れゴミ虫」」

三人は気にせず会話を続けていたのだった……

後日。

話を聞いた織姫とチャドもなるべく一護の側にいる様になり、織姫と一護の仲がちよつと縮まったりだとか。

ストーカーが毎日一護に会いに来て、日々バトルを繰り広げる様になつたとか。

ストーカーも力に目覚めてより一護の側に近寄る様になり、一護のSっぷりに更に磨きがかかったとか。

とにかく、
一護の周りは賑やかになりましたとき。
おしまい。

DM vs DS（後書き）

こんな一護が読みたい……

普段は見かけに反して優しいのに、キレるとDSになる一護とかマジうまい？

感想・誤字脱字のご報告、お待ちしております。

ネガティブ一護

自分の名前が嫌い。

当時『一つ』であつた真咲さんを『護』れなかったから。
名乗る資格なんて無いと思つている。

周りは「一^{いち}」と呼ぶ。

目付きの悪さを隠す為、前髪を伸ばし、眼鏡をかけている。
猫背。周りは身長が低いと思つている。

常に俯いている。

ボソボソと話す。

自分の意見を言わない。

なので、周りは「暗い奴」「キモい」と認識している。

喧嘩は売られるが、買わずに逃げる事がほとんど。

大切な人（家族・たつき・友人）が危ない目にあつたら即買う。

ルキアと過ごすうち、徐々に前向きになつていく。

名前のことも、周囲に「一護」と呼ぶのを許す様になる。
そのうち好意を抱く様になる。

ルキアも、一護を好きになつていく。

王道ラブコメ（？）になる予定。

お互いの心の穴を埋め合う二人……

でも傷の舐め合いではない！

ネガティブ一護（後書き）

こんな一護をみたい……！

感想・誤字脱字のご連絡、よろしく願います！

BLEACH×青の祓魔師？

一護、なんらかの理由で『BLEACH』世界で死亡。

『青の祓魔師』世界に転生。

元々垂れ目以外は母親似だったが、転生してからは髪色（橙色）以外は勘弁に母親似。

めちゃくちゃ美人。なのでモテる（男女共に）。

髪を伸ばしているのも更に女性的に見える（髪を伸ばしている理由は後述する）。

それなりに力のある祓魔師の両親のもとに生まれる。

『青い夜』に両親が死亡。

両親の知り合いだった藤本獅郎が引き取る。獅郎は双子だけ引き取るよりも目眩ましになりそうだと思って引き取った。徐々に愛情が育っていった。

双子と育つ。仲はめちゃくちゃいい。

雪男は普通に『兄さん』と呼ぶ（燐と区別する時は『一兄さん』と呼ぶ）が、燐は「俺が兄貴だ！」と言い張り、一護も特にこだわりはなかった為「一護」「兄貴」と呼び合う。

一護は家族のためならば『なんでも』する。

双子は、「家族ってそういうモノなんだ」と誤解し、揃って結構無茶する。

周囲は止めるが、聞く耳を持たない。

前世の記憶持ちだというのは獅郎とメフィストしか知らない。

戦闘能力は生前と変わらないので、祓魔師になりたいと一桁の時から言っ

メフィストは、戦えるだけの力があるならばと利用する気満々。
獅郎は渋っていたが、一護本人の希望により被魔師を目指すことを許可する。

雪男には黙っていようとしたが、本人が希望したのでこちらも許可した。

雪男と同じ時期に被魔師の資格を取得。

誕生日の差により、最年少での資格取得はなかった。

ただし、階級は上一級被魔師。最年少、最短でここまで上り詰めてみせた。

取得資格は、騎士、医工騎士、手騎士。

今は詠唱騎士の資格取得を目指している。

いずれすべての資格を取得し、聖騎士になろうとしている。

燐のことを守るため、高い地位にいた方が都合が良いから。

塾の教員ではない。

ただしメフィストの気まぐれで臨時教員になることもある。

シユラとは普通に仲が良い。

名前に引っ掛けて「ベリー」と呼ばれる。

雪男と一緒にいると「よ、ベリー&ベリー」と呼ばれる。

原作通り雪男は訂正するが、一護は慣れているのでスルーする。

シユラは一護の髪色と手触りが好きなので伸ばさせている。

一護は別に不都合は無いので切らないでいる。

前世で生きた年数+15年&前世でのとんでも体験のおかげでめったなことでは動じない。

性的なことであっても、サラッと流せる。

むしろ自分から言うこともある（割とどぎついことも言える）。

家事全般得意。

ただし、料理だけは燐の方が上手い。

普段、一護はデザート担当。

お菓子は料理と違って材料を細かく量っていかなくてはならないため、燐は苦手。

<スベック>

・前世の力はすべて使える。

・前世で頑張ったため『斬拳走鬼』はほぼ完璧。

・剣術は『表向き』エンジェルと互角の腕前。本気だと瞬殺。

・医療の腕は普通。治癒鬼道が使えるのでこっさり使っている。

・使い魔は龍。呼びかけは、

『の神よ、御願ひ奉る。現世の穢れしものをば、其の力を以つて、神払いに払い給え』

・詠唱はほぼ完璧。試験を受ければ間違いなく受かると言われている。

・とにかく強い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4392y/>

小さいお話

2011年12月19日19時45分発行